鎖空のアクアリウム

有馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鎖空のアクアリウム

【Ｎコード】

Ｎ４０２９Ｄ

【作者名】

有馬

【あらすじ】

遙かな未来、何処まで続いているのか想像できないほどの巨大な建造物の内部で人々は暮らしていた。大部分の人々は「外」や「空」の意味も知らずに、それが当たり前のように一生を終える。その中で「死」によってのみ出会う「僕」等・「彼」等・「彼女」等の物語。短編連作です。

沈黙の色

沈黙には色が付いている。それが純粋なものであればあるほど籠められた想いは研ぎ澄まされて、僕の胸に二度と消えない痕を残す。

僕と彼女、それに彼の遺体を乗せたエレベーターは緩やかに下降を始めた。

葬送専用のダストシュートはここから１０００階程下にある。その間の十数分が僕と彼女と彼にあてがわれた最後の時間となった。高熱滅菌処理を施された彼の遺体を前に、壁際の座席に座る。程なくして、彼女も隣に腰を下ろした。四肢切断され、透明な真空パックに包まれた彼の遺体は白かった。何一つ残さない無言の白だ。

高熱滅菌処理の名残で、コンビニの店内程の広さをもったエレベーターの中は蒸せるような暑さだった。服と肌が密着して、頬をゆっくりと汗が伝う。下降するエレベーターから何から、これまで何の障害もなく流れていた時間が這うようになり、じわじわと速度を落としていた。唐突に音を立てて、彼女が上着を脱いだ。続いて大きく、そして深く息を吐き出した。暑かったからというより、このまま停止へと向かう時間に逆らうかのように。僕はそのまま彼女が何か喋ってくれるのを期待したが、彼女の動作はそこで終わりだった。彼女は彼の遺体の先、彼と同じ白色の壁を睨み、脱いだ上着を握りしめた。僕は頭を垂れた。時間は訪れた沈黙に絡め取られ、それきり僕も彼女も動かなくなった。

ふと単調だったエレベーターの駆動音が変わって、身体に強烈な重力がかかった。顔を上げてドアの前の階数表示を見やると、最後の時間は数十秒も残されていなかった。やがて低い電子音が響いてドアが開いた。ドアの先もまた白かった。僕はしばらく開いたドアの向こうをぼんやりと見つめていたが、おろむろに立ち上がった。ひどくふらついた。身体が重さを何処かに忘れてしまっている。白

い壁を睨み続けていた彼女もゆっくりと立ち上がり、2人がかりで彼の遺体を順々にエレベーターから運び始めた。彼の遺体はその大きさに違わず巨大な質量を伴っていた。真空パックの両端を彼女と持ちあって腕と首を、2人では持てなかった足と胴はカートに乗せて運び出した。葬送室もエレベーターの内部と同じくらいの広さだった。空調が効いていて、汗は瞬く間に引いた。

部屋の中央には白い柩があった。柩のそばまで彼を運び終えると、エレベーターのドアが閉まった。駆動音が遠ざかり、無音が耳朶を打つ。柩の蓋を開けると、果てしなく下方へ続く暗い闇があった。葬送用ダストシュート。呼吸しているかのように、微風が頬に当たった。彼女と目を合わせた。彼女が頷いた。

左足を抱え上げ、柩の中へと入れる。彼の足は人1人分の入り口よりひとまわり以上大きく、膝を畳まなくてはならなかった。真空パックを手放すか細い音を最後に、彼の左足は永遠に僕と彼女の前から消えた。

「彼はマクロソミアだったのですか」

葬送用のエレベーターから抜け出て、僕と会ってから初めて彼女が口を開いた。今の今まで喉の使い方を忘れていたかのような、深くひび割れた声色だった。僕はそこで彼女を初めてまともに見た。幼い顔立ちだった。成人してから間もないのだろうか。

「これ、君は今回が初めてだったのかい」

肩がぴくりと震えたように見えた。数瞬遅れて彼女が首肯する。身元不明や引き取り手のいない遺体は、男女一人ずつランダムで選ばれた成人した市民の手で弔われる決まりだった。葬送業者によって滅菌され真空パックに包まれた遺体をダストシュートに放り込む――確率として一生に何度もある義務ではないが、それでも自分がそうなるかもしれないまでに幾らかは他者の死を間近で見ることになる。

無骨な通路を歩きながら、息を吐き出して答える。「巨人症（マクロソミア）患者は僕も初めてだ」

原因不明の過度成育症。第二次性徴期に平均をはるかに逸脱して身体が巨大化し、結果として日常生活に著しく支障をきたす。有効な治療法は確立されていないらしい。何層何万階にも連なり挟まれた部屋は大きくすることはできない。壁を広げようにもどこもかしこも満員だった。市民一人ひとりにあてがわれた部屋の容積に個人差をつけようとしても、彼の周囲に住む住人がそれを許さなかったに違いない。

立とうとしても天井につかえて立てず、動こうとしても動けず――

「周囲の全てに拒まれて、彼は息絶えたのですか」

肩を震わせて、搾り出すように彼女は小さく呟いた。その僅かな空気の振動は僕の前で儚く霧散した。僕は何も返さなかった。何も返せなかった。僕と彼女の周りが白い沈黙に包まれた。痛いほどに白い。

事前に指示されていた幾つかの作業用エレベーターを乗り継いだ後、僕と彼女は普段の雑踏の前に出た。彼の死によって出会った僕と彼女は本当の他人同士に戻るのだ。

彼女は上着を羽織り直し、ぼんやりと立ちすくんでいた。軽く手を上げて僕は一足先に人混みの中に帰り、誰かへと還った。しばらく歩いた後でふと振り返ってみると、遠くのほうで彼女が僕のいる辺りを視界に収めているのを見つけた。別れた場所から一歩も動かずに、その瞳は僕が溶けている群衆を映していた。そこで気付いた。彼女はまだ沈黙の前に自身を晒しているのだ。立ち止まり、彼女の方を見た。気付くと意識の中から雑音が遠ざかり、僕の外側へと追い出されていた。急に辺りが白く染まったように感じた。彼女の中で僕の姿が像を結び、僕は彼女に会釈した。彼女がぎこちなく頭を下げる。

人の流れは次第に重く速くなっており、幾つかの波が引いたとき彼女の姿はもうそこにはなかった。身の回りの雑音が息を吹き返し、

気付くと僕の意識は白ではなくなっていた。

鳥は彼方へ飛び去った（上）

僕にとっての昔流行った曲に、身体を構成する元素は全て鳥であると歌ったものがある。どんなに閉じこめようとしても、外に出たがると。成程と思う。鳥は外を飛ぶものだ。

急上昇を続けるエレベーターの座席でまどろんでいると、不意に声をかけられた。

「ご一緒してもいいですか」

ボックス席の前に、少女が立っていた。足下の荷物をどけてスペースを作ると、一礼して対面に腰を下ろした。

席についてしばらくして、彼女が丁寧に切り出す。

「どちらからいらしたのですか」

顔を上げて目を合わせた。曇りのない素直な瞳がそこにあった。

「M層の3万1千2百階」

「だいぶ遠くからいらしたのですね。私はK層の2万7千8百階で――このすぐ近くです」

そう言うと、高くもなければ低くもない等身大の声で喋り始めた。ありのままの声音が彼女の輪郭を精巧に形作った。

長く長い何かをしている途中。そんな空気を纏っていた。

喋っている内容は次の瞬間には忘れてしまいそうな、他愛のないものだった気がする。

何とはなしに話を聞くうちに、耳鳴りと共に意識がはっきりとしてきた。喧しく客車の車輪が壁のレールと擦れる音に混じって、ヘッドフォンから澄んだ歌声が聞こえてきた。疾走感あるアップテンポなのにどこか空虚で、寂しさを含む音色だった。どこかに何かを置き忘れてきたかのようだ。手元のプレイヤー画面を見れば、トラックはだいぶ先まで進んでいた。

彼女が覗き込む。

「何を聴いていらっしゃるのですか」
再び尋ねられ、視線を合わせた。たまたまエレベーターで同じボックスだっただけなのに、どうしてこうも興味を示すのか。若干の驚きを持ちつつも、ヘッドフォンの片方を外し、手渡した。彼女は両手で受け取ると、髪を掻き分け耳に当てた。
「『電子の鳥』ですか。ガブリエルの」
また驚いた。廃盤どころかオリジナルのアナログデータも消失した、かれこれ半世紀以上前の曲を知っているとは。
「どこで聴いたんだ？　『電子の鳥』なんて」
思わず身を乗り出した。
「両親がガブリエルのファンで、物心ついたときからよく聴かされました」
「これを我が娘に――変わってるね、君の御両親は」
「そういうと貴方も変人になってしまいますよ？　わざわざ聴かせてくれるなんて」
わずかに笑いを含んで返される。言われれば、否定はできない。僕もこの『電子の鳥』が好きだったし、プレーヤーに入れた数千の楽曲の中で一番再生数が多いからだ。
そういえば数千曲入れているとはいえ、その中で普段から聴く曲はせいぜい数十にとどまっている。プレーヤーには順番に聴くだけで一生かかりそうな曲数が入るようになったものの、個人用としては果てしなく巨大な記憶媒体を埋め尽くすほどに聴く音楽があるとも思えない。
手元のプレーヤーを見る。端子接続されたヘッドフォンは途中で二つにわかれ、片方は彼女へと続いている。
「決して使われることのない記憶領域か」
「？　それはどんなところなんでしょうか」
知らず知らずのつぶやきが引っかかったのか、彼女がきいた。
「記憶の埋め立てられたところから見て、ただひたすらに遠いんじゃないのか」

これから行く場所を想像して何となく答えただけだったのだが、彼女はそれで合点がいったようだった。

そうこうしているうちに曲はもうすぐ終わろうとしていた。曲の最後はフェードアウトで、息の長いストリングスが続く。次第にエレベーターの駆動音が曲を飲み込んでいって、そろそろ曲を変えようと液晶パネルに手を伸ばした。

「最後まで聴いていいですか」

伸ばした手が止まる。

トラックの残り十数秒、耳を澄まして聞こえるか否かの時間を譲りわたすと、彼女は目を閉じた。僕ももう片方のヘッドフォンに耳を傾ける。

何かを置き忘れて、でも振り返ることができずにひたすら疾走する旋律は細り、やがてどこかへ霧散した。

鳥は彼方へ飛び去った（中）

そもそもこのエレベーターに乗っていること自体、彼がきっかけだった。

彼と会ったのは偶然だった。

会ったときには既に別れもはっきりと見えていた。

「もう長くねぇんだから」

それが彼の口癖だった。そういって空虚に笑った。

そう諦めるなよ、とか、普段無責任にも脳裏に浮かぶ第三者の意見すら会ったときに消えていた。

彼と出会ったときに、僕はもう巻き込まれていたのだ。

会社の出張帰りに道に迷った。電波状況は最悪で、現在地が全くわからない。見知らぬ区画で、助けを求めようにも人通りは極端に少なかった。方々をどれだけ歩き回ってもなにも変わらなかった。最悪遭難して行き倒れも考えられた。それはあまり珍しいことではなかったからだ。ここで道に迷うことは限りなく死に近かった。行き倒れで死ぬ奴は僕が生まれる前から何千何万といただろうし、僕と同じ運命を辿る奴はこれからも数え切れないほど現れるだろう。

無骨なコンクリートの壁と天井に、僕のふらついた足どりが遠くまで反響する。

息を吸い込むと喉が凍りついた。吐いた息がホコリと一体になってひび割れたアスファルトに舞い落ちる。時間の感覚はとうに消失していたし、僕の意識も凍りつつあった。

歩くのを諦めようとしたときだった。

「おい、そこに誰かいるのか」

野太い声が近くのドアの向こうから聞こえた。明かりが漏れている。

助けを求めた。

彼はここ一体の地理に明るかった。僕が彼から熱い飲み物を御馳

走になっている間、丁寧な見取り図を書いてくれた。何度も頭を下げた。おかげでその日は無事に自分の部屋に帰ることが出来た。
次の休日、彼にお礼をしに訪問した。彼の見取り図は精緻で、もう道に迷うことはなかった。
そして、彼が長くないことも最初に出会ったときに既にわかっていた。それでも、いやそれだからこそ僕は来なければならないと心の底から思っていた。
ベッドで身を起こすと頭が天井につっかえ、擦れていた。
もう満足に動くこともままならなかった。
見た目だけなら彼は健康そのものだったし、病気もない。だがもう、生きてはいけなかった。普通に部屋の中を歩くことすら出来ず、扉から外に出ることもできないのだ。
彼は他の大多数の人々に比べて巨大だった。ただそれだけが原因だった。
原因不明の過度成育症候群。第2次性徴期に平均をはるかに逸脱して身体が巨大化し、結果として日常生活に著しく支障をきたす。有効な治療法は未だ確立されていない――
巨人症（マクロソミア・シンドローム）。
そう名付けられ、恐れられていた。
これはこの社会システムの中で誰かが必ず迎える最後でもあった。誰かが必ず遂げる理不尽な最後だった。
何層何万階にも連なり挟まれた部屋は大きくすることはできない。壁を広げようにもどこもかしこも満員なのだ。そして部屋の容積に個人差をつけようとしても、彼の周囲に住む彼以外の住人がそれを許さない。公共施設を除けば、どこもかしこもいっぱいだった。会社から有給休暇をもらって彼と過ごせたのはほんの2日間だった。
泊まり込ませてもらって、部屋の隅の椅子を一つ借りて、時間を忘れてどうでもいいことをひたすら語り合った。
平凡に生きてきた僕のこと。
平凡に生きてきた彼のこと。

小さい頃はこの区画は人通りが多く、縦横無尽に遊び回っても安全だったこと。
病気になってからの話には一切触れなかった。
それと驚いたことに、同い年であった。
「先日友達になってくれたお前さんにひとつ頼みがあるんだが」
壁際の椅子で姿勢を正した。僕にできることなら何だってすると決めていた。
差し出されたのは、檻に入れられた1羽の鳥。
「ネットで競り落としたやつなんだが、これが可愛くてな」
いとおしげに檻をなでる。
「こいつの本当の名前とか、そういうのはよく分からない。ただ今言えるのは、ここはこいつの居場所じゃねえってことだ、なぁ？」
太い声が震えた。
「おれはこの身体に生まれ育って後悔はしちゃいねぇ。神様がくださって、両親が手塩にかけて育ててくれたんだ。もし後悔なんてのがあるとしたら、どこもかしこもいっぱいなここで生きなきゃならなかったことだよ」
全身からその生の全てを絞り出すようにいった。涙は僕が来る前に枯れていたらしい。
「やっとここから出られるんだ。そしたらおれとそいつをどこか広いところに連れて行って、見せてくれ。そいつが高く高く飛ぶところを」
そういって、満面の笑顔を僕にくれた。
「お前が来てくれたことで決心がついた。ありがとうよ、我が親友」
その瞬間、僕にとっての彼は想い出になってしまった。
あくる日、彼は死んだ。合法的な方法で自らを薬殺した。
役所の係員がやってきて遺体は四肢切断され、ようやく部屋から出ることができた。家族に先立たれていた彼の遺体を引き取る者はいなかった。高熱滅菌処理を施され、ダストシュートに放り込まれた。果てしなくまっすぐに下へと伸びるその先がどうなっているの

か、僕には知るよしもなかった。
行き倒れと同じく、何処にでもある話だった。
違うのは死んだのが誰かということだ。そう思いたかった。もしかしたら、それすらも違わないのかもしれないが。
彼の遺品は迅速に整理・処分され、部屋は業者が徹底的なクリーニングをかけた。
空っぽになった彼の部屋。彼の痕跡はもう、どこにもない。
ただ解っているのは、空いたなら誰かがここで死んだことだけだ。
まだ何もない広い部屋。
どこかで生まれた誰かにあてがわれる部屋。
そして――
僕は包みを二つカートに入れて、部屋を出た。会社に休暇の延長を連絡した。

鳥は彼方へ飛び去った（下1）

その後何回かの停車階を経て、次第にエレベーター内から人がいなくなっていった。
時計を見ると、ボックスで同席してから二時間程経っていた。
打ち解けて話し込んでいれば早いもので、次は終点である。
乗っているのはたぶん、僕らしかいない。
「そういえば、どちらまで行かれるのですか」
「こいつを飛ばしに最上階へ」
そういって荷物の中の包みをひとつ開けた。急な光で驚いたのか、檻の中で羽根をばたつかせた。
彼女が目を見開いた。
「……何ですかこれ」
「たぶん白鳥」
「ハクチョウっていうのは？」
「見ての通り鳥の一種」
「あ、これがトリなんですか。へぇ……」
「君、鳥を見たことがないのかい」
「どういったものかは親から教わっていましたが、実際にはないですね。それにこの階層の人間で『トリ』を知っているのは少ないと思います。知っていても仕方のないことだと役所に思われているんでしょうね。――ところで、もう1つの包みの方は」
今度はこちらから目線を合わせ、ゆっくりとかぶりを振った。
一瞬僕の瞳を覗きこんだあと、彼女はそれ以上深く追求しなかった。
「そういう君はどこへ行くんだ。K層の2万7千8百階はとうに通り過ぎているのに」
「多分あなたと行き先は同じです。K層の最果ての階まで」
『最果ての階』？

その意味について尋ねようとしたとき、轟音と激しい揺れと共に照明が落ちた。
暗くて何も見えない。
停電だと気付くまでにずいぶんとかかった。
慣性の法則でしばらく上昇していたエレベーターは重力と安全装置の作動によって止まった。同時に僕の思考もほんの数秒間停止していたようだ。
「あの、大丈夫、ですか？」やけにうわずった声が正面から聞こえる。
「ああ」
「そうですか。揺れた拍子に怪我とかは」
「ない。ないよ。大丈夫だから」
もっとも、こちらも自分の声が自分のものではないようだった。わずかに喉が震えているのを感じる。
本当に何も見えない。
時間が経ったら復旧すると思いこんでいたが、事態はそう甘くないらしい。
１０分待っても、２０分待っても。
……1時間待っても相変わらず照明は落ちたままだった。
足元の荷物を引き上げて、カートに載せた。
壁に埋まった備え付けの非常灯を引き抜く。
仕方ない。
「ここからは徒歩かな」
「それ、きつくないですか？　待っていたほうが」
「悪いが待てない理由がある。終点まで残り数分のところまで来ていたんだ。エレベーターもかなり減速していたし、たぶん何とかなる」
有給休暇の期限が差し迫っていた。自分の時間はもう、あまり残されていない。
とりあえず、最果ての階に行かなければならない。

「わかりました。私も行きます。道案内しますから」
「ありがとう。助かる」
手探りで非常用の取手を掴んでドアをこじ開け、外に出た。
ここもまた暗く、冷えた風が吹き抜けていた。
前方を照らすと、運よく作業用の足場と通路らしきものが見えている。エレベーターはそこから約1階分上で止まっていた。思わず身震いしたが、飛び降りられない程の高さではない。
「足元に気をつけろよ。落ちたら――」
試しに客車の下方を照らすと、光は全て暗闇に吸い込まれた。少し胃が捩れた。
「――きっとどこまでも落ち続けるぞ」
「は、はい」
先に飛び降りて、彼女にカートを落としてもらった。程なく彼女も着地する。この高さに僕はかなり恐怖を覚えていたが、彼女はそれなりに度胸があるらしかった。
周囲は静寂に包まれていて、変わらずに暗い。非常灯がなければ、目を開けても閉じてもたいした差はないのだろう。
「ところで、最果ての階っていうのは」
カートを引いて通路を歩きながら、何気なく尋ねた。足音が二人分とカートのローラー音がかなり遠方まで反響している。
先ほども言いましたけど、と最初に加えた。
「たぶんあなたが今向かっているところと同じです。呼び方が違うだけで」
すぐ隣から声がした。
「その先に何もないんです。最上階というより、あそこは世界の果てなんです。初めて来たとき、本当にそう思いました」
「君は最果ての階に何をしに行くんだ」
「ただ行くだけです」
「行くだけ？」
「そうです。たまに登ってみたくなるんですよ」

通路の先に業務用のエレベーターを見つけた。試しに乗り込んでみると、驚いたことに停電の中でも動くようだった。
「ガス圧か何かによる独立したものなんでしょうね。駆動音が全然違う」
「ガスなんて使うのか？　この階層は」
「下方階層ではガス漏れが起きれば大災害ですが……最上階が近ければ使えてもおかしくないんじゃないですか？　仮に何か事故が起きたとしてもそのまま空へ抜けて、濃度が薄くなれば無害ですし」
空。
知ってはいたが、あまり聞かない単語だった。これからそれを目にするのだ。
しばらくしてエレベーターが止まった。そこは最上階に一番近い無人駅、二時間程早く辿り着くはずだった終点のプラットホームだ。薄暗い改札を抜ける。
「ここからは私についてきて下さい」
彼女の先導でカートを引きずりながら最寄の階段を登り始めた。停電はまだ続いていて、非常灯で足元を照らしながら歩を進める。
無骨なコンクリートの階段を数階登ったあと、階段が鉄骨式に変わった。上へ下へ、靴音が反響する。そこからさらに数階登って、やがて天井が見えてきた。
階段を登り終えて、彼女が無骨な鉄のドアをゆっくりと開けた。
「着きましたよ」
そして、僕は目にした。
「最果ての階です」

鳥は彼方へ飛び去った（下3）

その先には何もなかった。彼女の言うとおり、何もなかった。
ゆるやかに風が吹いている。
黒く、暗かった。それなのにぼんやりと明るい。
これが。
これが――空。
「晴れてますね。星がよく見えます」
彼女の声がやけに遠く感じた。
大きく身震いする。
その果てから目が離せなくなっていた。
足元がおぼつかない。ここはどこだ？
僕は一体どこに立っている？
上に向かって引っ張られた気がした。上に向かって落ちていく。
いや、もっと速い。吸い込まれる。
吸い込まれる！
「大丈夫ですか！」
気がつくと、コンクリートの地面に倒れこんでいた。
上を見るのが怖くなっていた。怖くてたまらなかった。
「落ち着いて――私も初めて来たときは、あなたと同じ状態になりました」
呼吸をゆっくりと整えたところで、ごろりと仰向けにさせられた。
ただ、ひたすらに圧倒的だった。
「しばらくそのままで、リラックスしましょう」
彼女が隣に寝転んだ。
急に眠気が襲ってきて、そのまま少し眠った。

目を開ける。時計を見ると、あまり時間は経っていなかった。
「大丈夫ですか？」

「ああ……」
少しの間ぼんやりとしていた。
「本当に、永遠に届かないほどに遠いんだな」
「そうですね」
空を見ることへの恐怖はいくらか薄れていた。
不意に羽音がした。そこで我に返った。
「その子、待ちくたびれてたみたいです」
彼女が笑って言った。
そうだ。僕にはやらなければならないことがあったのだ。
起き上がり包みを開けると、鳥が一心に上を見つめていた。
檻を解き放ち、本当の外に出してやった。
鳥には檻の中の記憶がないかのようだった。翼をいっぱいに羽ばたかせると、辺りを縦横無尽に飛び回った。
「飛んでる……そうか、飛んでるんですね。あの子」
「もう、戻ってくる必要もないんだ」
「なんでだろう。初めてみる光景のはずなのに、ずっと前からわかっていたような気がするんです」
「記憶というのは自分の脳の中にあって覚えている類のものではなく、今まで自分と関わった事物に触れる時突然に思い起こされるものだそうだ。君は鳥を知っていたし、何度もここに来ているんだろう？」
確かそんな話を、学生だった時分に聞かされた。そしてこのこともたった今思い出されたものだ。
「まるで、夢みたいですね」
「そうかもしれない」
忘れていた、とかそういうことじゃない。
逢ったときにすべてを思い出す。ただそれだけのことだ。
そして、もうひとつの包みもほどいた。
待たせたな。
遺体処分の際に譲り受けた、冷凍滅菌処理されて真空パックに入

った彼の首だった。
それを見て、彼女の顔が少し引きつった。無理もない。
「それは……」
「話しただろう。『彼』だよ」
パックから取り出し、抱え持とうとした。だが、ふらついてうまくいかない。
「待って！」
彼女が手を添えた。
「私も持ちます。持たせてください」
「これが何なのかわかるよな？　怖くないのか」
「……びっくりしただけです」不思議なことに、強がっているようには聞こえなかった。
人の首というのはかなりの重量があるもので、カートで運ぶならまだしも支え持つとなると力がいる。互いの両手で支え合ってようやく安定した。
「すまないな。手伝わせてしまって」
「私はあなたに関わった。お礼を言うのは私です。ありがとうございます」
彼女の手は震えていた。
「大丈夫か？　持つよ。それが僕の役目でもあるんだし」
しかし彼女は決して首を離そうとしなかった。
はるか虚空を飛ぶ鳥を見上げながら、何となく彼に話しかけてみた。
「なあ。見えてるか？　気持ちよさそうに飛んでるぜ。あんたから預かった鳥」
『ああ、よく見える。本当にありがとうよ、我が親友』
どこからか、ひどく懐かしい声がした。
首の方から聞こえたわけではなかった。

何故か僕の中からだったような気がした。
『それからお嬢ちゃんも、ありがとう。これでようやく行ける』
「いえ、私は――」
静かな嗚咽が聞こえた。彼女は泣いていた。
ふと、両手の重みが無いことに気付いた。
「あれ？」
『本当にありがとうよ、我が親友』
今度は上の方から聞こえた。気のせいか、少しずつ声が遠ざかっている。
待て。
「あんた、どこにいるんだ」
この声はどこから聞こえてくる？
はるか上からのような気もする。本当に僕の中から響いている気もする。
「行ってしまうのですね」彼女はもう、わかっていたようだった。
『ありがとうよ、我が親友』
言葉が段々と短くなり、遠ざかる。もう時間がないのだ。僕が何をどんなに足掻いたとしても、それだけは絶対に変わらない。
彼は行ってしまうのだ。
『我が親友』
彼が行ってしまう。
その前に早く言わなければ。言うんだ。
これが本当に最後なんだ。
「あんたに会えてよかった。こちらこそありがとう」
『――――』
最後の一瞬で言い切る。やがて彼の気配は消えた。
遠くの空で白鳥が鳴いた。
僕たちはまたエレベーターに乗っていた。
人通りのあるところの電気は既に復帰していた。

この遥か下に僕の部屋は残されている。僕の職場もある。僕の時間も、そして記憶もまだこの中にある。
彼女だってそうだ。
ならば、僕らは帰らなければならない。帰るしかないのだ。
空っぽのボックス席にふたり腰を下ろして、『電子の鳥』を再生させる。
彼女にヘッドフォンの片方を差し出すと、会釈して受け取った。
僕はそのまま目を閉じた。彼女も目を閉じる。恐らくは一生消えることのない、ひとつのイメージをまぶたに浮かべて。
K層の途中で彼女はエレベーターを降りた。
「では、私はこれで」
「ああ。そうか」
「――また会えますか？」
「僕らには同じ行き先があるじゃないか。そう遠くないうちに、また」
「そうですか。そうですよね」
微かに安堵の笑いを含んだ彼女の言葉。
「そうだ、ひとつだけ聞かせてくれ」
彼女とまっすぐに目を合わせる。
「君は誰なんだ」
「道すがら出会った、あなたがよく知ってるひとです。それで充分でしょう？」
一瞬、視界が白で覆われる。そうか。
そう言われればそうだ。僕も彼女も、それで充分だった。
『電子の鳥』が終わりかけていた。疾走の旋律が細っていく。
彼女はヘッドフォンを返した。
フェードアウトの時間を僕に手渡し、彼女は会ったときと同じく一礼して去っていった。
「それでは、また」
エレベーターから降り、彼女の姿は人混みに溶けた。彼女は誰か

になって、元いた場所へと帰っていった。ボックスには僕だけが取り残された。
エレベーターが下へと動き出す。次は僕が帰る番だ。
ヘッドフォンを両耳にあてて、僕は再び眠りに落ちた。

檻から出て頭上を何度か旋回していた鳥が大きく、大きく羽根をはばたかせている。
永遠に、決して使われることのない領域。
空虚にして無限。
それを見て、僕の中の鳥が騒ぎ出した。
外へ、外へ出たいと。
しかし、僕はここにいることしかできない。
ただ見上げるしかない。
そして、元いた場所に帰るしかない。
彼の電子の鳥はどこかへと飛び去った。
置き忘れはなく、全てをその身に捧げて。
遠い彼方へと飛び去っていったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4029d/

鎖空のアクアリウム

2010年10月11日20時32分発行